

## - 本リストを利用するために -

### 1 作成の目的

本道の地名の多くは、その地形の特徴や土地の産物など、身近な生活を反映して付けられたアイヌ語に由来しています。アイヌ語地名は、アイヌの人たちの伝統的な生活や本道の自然環境を理解する上で貴重な文化財産であり、その普及を図ることは、アイヌ文化の振興や理解の促進を図る上でも極めて有意義なことと考えられます。

しかしながら、時代の変遷とともにその本来の形が失われてしまったり、伝承が途絶えたため既に本来の語源が分からなくなった地名も少なくなく、その保存と普及を図ることはまさしく急務といえます。

このため、道では平成11年9月「アイヌ語地名普及会議」を設置し、計3回にわたる検討を経て、各種地名表示や関係刊行物へのアイヌ語併記など具体的な普及方策を推進するための基礎資料として、本リストを作成したものです。

### 2 作成に当たった基本的な考え方

本来の地名研究は、可能な限り多くの古地図や古文書を紐解くとともに、可能な限り詳細な現地踏査や多くの古老から聞き取り調査を行うべきもので、膨大な時間と手間を要するものですが、一方、地名の由来等の保存・普及は緊急な課題と考えられます。このため、本リストの作成に当たっては、新たな研究を行うのではなく、既存の基礎的な地名解を紹介することに止めることとしました。

また、現在まで数多くの研究者が地道な研究を進められ、貴重な成果を発表されていますが、音に合わせるだけなら様々な解釈が可能であるなどの特殊性もあり、一部の地名を除くと、実に数多くの地名解が存在しています。このため、本リストでは、本道の地名研究を行う上での基礎的解釈

が網羅され、多くの研究者に参考文献として活用されている「山田秀三著『北海道の地名』」を中心に、その他自治体刊行物等も加え、当該文献中の解釈のうち主要と思われるもののみを引用紹介することとしました。

更に本リストにおいては、前述のように、種々の地名解が存在し、その中から本来の意味や由来を特定することは極めて困難な現状を踏まえ、後の具体的な活用に当たっての参考となるよう、各地名のアイヌ語地名としての確定度等を付記することとしました。

なお、この「基本的な考え方」については、アイヌ語地名の保存・普及の緊急性を理解いただき、「アイヌ語地名普及会議」の了承の元、決定されたものですが、同時に委員の皆様からは「検討期間が短すぎる」、「将来的には再検討が必要」などの意見をいただきました。また、個々の地名解について、一部委員からは、疑問ある解釈は「誤解を生じさせる恐れがあるので、登載すべきでない」との意見もありましたが、アイヌ語地名解釈の難しさや特殊性を理解する上で有効であり、あえて登載すべきとの結論となったことを付記させていただきます。

### 3 登載する地名の範囲

登載地名の選定等に当たっては、各種表示へのアイヌ語地名併記など具体的な活用にあたっての可能性や有効性を考慮し、原則として、市町村名及び多くの人を訪れる主要観光地等については、和名起源と思われるものを含めその全てを、その他アイヌ語地名の普及促進を図る上で効果的と思われる地名のうち、現在使用されている名称がアイヌ語を起源としていると思われるものについて登載することとしました。ただし、全道の膨大な数にのぼる地名を、限られた期間と文献により整理を行ったため、必ずしも原則通りの登載となっていない点もあろうかと思えます。御高察いただけましたら幸いです。

アイヌ語を起源としている地名の例示

○アイヌ語読みをそのまま、あるいは若干変化させ日本語表記したもの

〔 1 ページ 愛冠(あいかっぷ) アイカブ(aykap) 〕

○アイヌ語の意味を翻訳し、日本語を当てたもの(意訳)

〔 1 ページ 赤井川(あかいがわ)  
フレペツ(hure-pet 赤い・川) 〕

○その他何らかの形でアイヌ語地名が起源と思われるもの

〔 3 ページ 麻布(あざぶ) マップ(前略して)  
オタツニオマブ(o-tat-ni-oma-p) 〕

#### 4 リストの項目

##### (1) 現在の地名

地名には複数以上の区分(山、川、地区など)に同一名称が使われている場合が多くあることから、重複をさけるため、区分別ではなく、50音順に現在使用されている表記及び読み方を記載しました。また、同名地が多くあるため( )書きで所在市町村名を記載しています。

なお、由来が同一と思われる地名については同項整理しました。

(例 3 ページ 旭川〔市、駅〕 忠別〔川、山岳〕)

##### (2) 区分

当該地名が含まれる地域、自然形状等の区分を記載しています。

1 ページの「愛別」を例にとると、「区分」欄には「町」、「川」、「駅」、「山岳」、「ダム」と記載しています。これは「愛別」という名称が、町名「愛別町」、河川名「愛別川」、駅名「愛別駅」、山岳名「愛別岳」、ダム名「愛別ダム」に現在使用されていることを示しています。

##### (3) アイヌ語地名

(社)北海道ウタリ協会『アコロイタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』の表記法に基づき、カタカナ及びローマ字表記で記載することとし、原典がこれに準拠していない場合はアコロイタク方式に変換の上記載しました。

なお、アコロイタク方式は、各地のアイヌ語教室で用いられているなど、現段階では一般的な表記方法と思われるため、本リストの表記法として採用しましたが、「アイヌ語地名普及会議」の議論の中では、そのカタカナ表記法は日本語の文字の使い方に依存する方法のため、読みやすく親しみやすい反面、本来の発音を必ずしも忠実に表現するものではなく、「アイヌ語らしさ」を犠牲にすることも少なくないという意見もあったことを付記させていただきます。

表記文字一覧表

ア	a	イ	i	ウ	u	エ	e	オ	o
カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko
サ	sa	シ	si	ス	su	セ	se	ソ	so
タ	ta			トゥ	tu	テ	te	ト	to
チャ	ca	チ	ci	チュ	cu	チェ	ce	チョ	co
ナ	na	ニ	ni	ヌ	nu	ネ	ne	ノ	no
ハ	ha	ヒ	hi	フ	hu	ヘ	he	ホ	ho
パ	pa	ピ	pi	プ	pu	ペ	pe	ポ	po
マ	ma	ミ	mi	ム	mu	メ	me	モ	mo
ヤ	ya			ユ	yu	イエ	ye	ヨ	yo
ラ	ra	リ	ri	ル	ru	レ	re	ロ	ro
ワ	wa					ウェ	we	ウォ	wo

単語の最後などに来る「p」、「t」、「k」、「s」、「m」は、カタカナ表示ではそれぞれ、「ッ」、「ッ」、「ク」、「シ」、「ム」と小文字で表記しています。

(例 cikap-set チカフセツ)

ただし、「wakka」や「ceppo」のように一単語中に同一子音が連続している場合は、小文字「ッ」を用い、それぞれ「ワッカ」、「チェッポ」と表記しました。

また、「r」は直前の母音に従い(aア ヲ、iイ リ、uウル、eエ レ、oオ ロのように)、カタカナ小文字表記しています。

(例 arpa アヲパ kur クル)

母音がつなげて発音される場合の「イ」、「ウ」は、ローマ字ではそれぞれ「i」、「u」ではなく、「y」、「w」と表記しています。

(例 アイヌ aynu イナウ inaw)

ローマ字表記はひとつひとつの単語構成がわかるように「-」で区切り表記しました。

なお、固有名詞として解釈されているものについては、斜体もしくは“ ”でくくり表記しました。

( 例 15 ページ “ota-us-nay” ウタシナイ川  
32 ページ oro-wen-sirpet その中が・悪い・尻別川 )

本来アイヌ語には清濁音及びサ行とシャ行音の区別がなく、例えば川はペツ(pet)でもベツ(bet)でも、滝はソ(so)でもショ(sho)でも同じ意味で呼ばれたといわれていますが、本リストでは清音及びサ行音

に統一し表記しました。

また、湖(to)や道(ru)などは、トーやルーのように少し伸ばして呼ぶこともあったといわれていますが、本リストでは全て伸ばさない形に統一し表記しました。

カナ表記欄には、原則としてローマ字表記欄の各単語をアコロイタケ方式で記載しましたが、各単語を続けて読んだ場合に発音が変わる可能性が高いものについては、その読み方を「\*」で併記しました。

なお、その他、音韻が無くなる音韻脱落、無かった音韻が加わる音韻添加、音韻が他のものになる音韻転化などの特殊な発音の変化もありますが、変化する場合としない場合があるため、原典に変化についての記載があるもののみ、「\*」で併記しました。

#### (4) アイヌ語の意味

原則として出典文献の記述に忠実に記載しましたが、動植物名をカタカナ書きにしたほか、文節区切り「・」を適宜追加するなどの修正を加えています。

#### (5) 解釈及び由来

原則として出典文献の記述に忠実に記載しましたが、現在では理解困難と思われる表現や長大な解説文などについては、原典の趣旨を損なわない範囲で、より分かりやすいように修正や要約を行っています。

#### (6) 出典

本リストの各解釈については、そのほとんどを「山田秀三著『北海道の地名』」から引用登載しましたが、『北海道の地名』自体も諸氏の解釈を多数紹介している文献です。このため、当該文献中、山田氏の独自解釈を除く諸氏の解釈の紹介部分については、その原典著者(書)名を

記載しました。また、自治体刊行物など他の参考文献については、その文献名を記載しました。

なお、著者（書）の記載に当たっては、次のとおり一部省略して表記しています。

#### 著者（書）の表記

秦檜麻呂	秦	上原熊次郎	上原	蝦夷地名解	蝦夷
松浦武四郎	松浦	永田方正	永田	知里真志保	知里
北海道駅名の起源	駅名	更科源蔵	更科	山田秀三	山田
角川日本地名大辞典	地名大辞典	ホームページ	HP		

その他著者（書）についてはフルネームで記載。

#### （7）確定レベル

本リストの活用にあたっての参考としていただくため、どの程度、各地名の由来や意味など特定解釈が可能なのか、その度合いを次のとおり「確定レベル」として記載しました。

ただし、多くの地名解釈は基本的には全て推論です。たとえ確定レベルが「A」であっても、断定するものではないことを御理解ください。

- A：一定程度の根拠を伴う有力な解釈があり、ほぼ特定してもよいと思われるもの。
- B：特定するには根拠等が不足しているが、有力な推論があると思われるもの。
- C：多くの推論が存在するものや古く原型が忘れられたものなど、現時点では「不明」と言わざるをえないと思われるもの。

なお、アイヌ語地名の確定レベルの選定に当たっては、次の具体的判断基準によりましたが、短期間の作業のため、委員及び協力者からの情

報提供の他、文献上の記載を主体に判断せざるを得ませんでした。現地の状況等情報量不足は否めないところですし、見方によっては全く異なる判断もあろうかと思われ、格付けについては大いに異論のあるところと思われま。あくまでもひとつの「目安」として理解してください。

#### 確定レベル選定に当たっての具体的基準

- A：次の～の全ての条件を満たすもの。
- B：少なくとも及びの両方を満たすもの。
- C：A及びB以外のもの、及び諸説があり特定が困難なもの。

#### 条件

- 音、意味、文法などアイヌ語として適切と思われる。
- 地理的条件や事実関係等解釈に妥当性があり、また、地名化される必然性があると思われる。
- 根拠となった場所や地形、事実等がほぼ確認できる。
- 従来の諸説に照らし適切であり、また一定程度の定説となっていると思われる。

なお、の条件の合否については、例えばキトウシ（kito-us-i ギョウジャンニク・群生する・所）地名など植生に関するものの多くは、植生の変化等により現状では事実確認が困難なため、条件に合致しないと整理するなど、あくまでも機械的に処理しています。

また、複数以上の解釈がある地名については、原則として次のとおり整理しました。

- ・全ての説が条件をクリアしていない場合：C
- ・条件をクリアしている複数以上の説があり、それぞれの内容が異なる場合（諸説あり特定できない場合）：C

- ・条件 をクリアしている複数以上の説があり、最終的なアイヌ語の形が異なるが、ほぼ同内容と思われるもの（いずれにせよ に関係していると思われる場合）： B
- ・ 1説のみ条件 をクリアしており、 をクリアしていない場合： B
- ・ 1説のみ条件 の全てをクリアしている場合： A

#### ( 8 ) コメント

上記「確定レベル選定に当たっての具体的基準」の各条件について、その合否等の経過を記載したほか、「確定レベル」設定にあたっての理由等について記載しました。

なお、 から の条件に記載した記号の意味は次のとおりです。

- : 条件に合致していると判定。
- △ : 条件に合致しているか疑問がある。
- : 情報不足等のため判断できない。

#### ( 9 ) 各種カッコ書きについて

原典の解釈等に対する、山田氏など原典著者以外の著者の補足説明や解説等については、 カッコ書きで記載しました。なお、この場合の説明者は「出典」欄の カッコ書きと対応しています。

- 例 4 ページ 阿蘇岩  
「アイヌ語の意味」欄の 柴木・多い・山、「解釈及び由来」の 同名の山が道内の所々にあり、何か霊山であったらしい。  
は、「出典」欄の 山田 氏の補足説明です。

また、原典にはリスト項目を網羅していないものも多いため、欠落項目に対する補足や、委員等の皆様から寄せられた意見を元に、現況に関

する情報等を { } 書きで記載しました。

#### 5 最後に

前述しましたとおり、本リスト作成に着手するにあたっては、なによりもアイヌ語地名の置かれている現状に鑑み、その保存及び普及の緊急性を優先いたしました。そのため、限られた時間及び手法により整理せざるを得ず、内容的には決して目新しいものではなく、また、全道の膨大な数の地名のうち、僅か千数カ所についてリスト化したものに過ぎませんが、アイヌ語地名の普及を進める上での、基礎資料の一種の雛形と理解いただき、今後の各地域や各分野における、アイヌ語地名の保存・普及の取り組みの参考としていただけましたら幸いです。

最後に、限られた条件の中、少しでもよいリストとなるよう御尽力いただきました「アイヌ語地名普及会議」委員の皆様、全くのボランティアにも関わらず寸暇を惜しまず御協力いただきました「アイヌ語地名研究会」有志の皆様、そして貴重な資料の提供や確認作業に御協力をいただきました市町村の皆様、必ずしも全ての意見等を反映できなかったことをお詫び申し上げますとともに、特段の御協力に対して心から感謝申し上げます。  
(平成19年1月末までに合併した新市町村名に訂正しました。)

平成19年2月

北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室

アイヌ語地名普及会議委員（敬称略・五十音順）

松浦武四郎研究会会長	秋葉 實	
白老アイヌ語教室講師	大須賀 るえ子	
北海学園大学工学部助教授	切替 英雄	
(社)北海道ウタリ協会理事長	笹村 二郎	(座長)
北海道大学文学部助教授	佐藤 知巳	
旭川アイヌ語教室講師	杉村 フサ	
元旭川商業高等学校教諭	高橋 基	
浦河アイヌ語教室講師	遠山 サキ	
千歳アイヌ語教室講師	中本 ムツ子	
北海学園大学人文学部教授	藤村 久和	

(北海道立アイヌ民族文化研究センター)

協力者(アイヌ語地名研究会有志) (敬称略・五十音順)

伊達市	池田 実	北見市	伊藤 せいち
苫小牧市	扇谷 昌康	小樽市	榊原 正文
美唄市	平 隆一	札幌市	高木 崇世芝
苫小牧市	渡辺 隆		

「アイヌ語地名研究会」有志の皆様からは、特に疑義ある解釈については登載すべきではないとの御指摘をいただきましたが、「作成にあたっての基本的考え方」でも述べましたように、「アイヌ語地名普及会議」における議論の結果、アイヌ語地名解釈の難しさや特殊性を理解する上で有効であるとのことから、あえて登載することとなった次第です。

また、確定レベルやコメント等につきましても種々御異議をいただきましたが、格付け等については本リスト独自のルールにより整理したものであり、「アイヌ語地名研究会」有志の皆様の意思と異なる点もあることを付記させていただきます。

参考文献

- ・山田秀三著 『北海道の地名』 北海道新聞社 昭59
- ・永田方正著 『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』 草風館 昭59
- ・山田秀三監修 佐々木利和編 『アイヌ語地名資料集成』 草風館 昭63
- ・田村すず子著 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館 平8
- ・萱野茂著 『萱野茂のアイヌ語辞典』 三省堂 平8
- ・知里真志保著 『地名アイヌ語小辞典』 北海道出版企画センター 昭31
- ・知里真志保著 『アイヌ語入門』 北海道出版企画センター 昭31
- ・「角川日本地名大辞典」編纂委員会編  
『角川日本地名大辞典 1 北海道 上下巻』 角川書店 昭62
- ・北海道企画振興部地域振興室市町村課監修  
『北海道市町村行政区画便覧 9』 北海道行政協会 平9
- ・(社)北海道ウタリ協会  
『アコロ イタク AKOR ITAK アイヌ語テキスト1』 平6

